

「自分で食べていける人」

篠原 厚子 昭和48年卒業(第25回)

清泉女子大学人文科学研究所 教授

「薬学」というキーワードは小学校時代にインプットされた。専業主婦が大半の当時、友人の母親が薬剤師であった。自分で働いて食べていける大人になりたかった私は、資格は女性が働くための手段であることを知った。数年の後、幸い理科系科目が好きだったので迷うことなく薬科大学に進んだ。尊敬する先生の指導を受けた1年間の卒業研究で、実験の面白さにはまり大学院進学を決めた。博士課程までいってしまうと就職がないよ、と先輩に忠告されたが、仕事が無かったら薬剤師で働けばよいと考えて、やりたい道を選んだ。

大学院を修了したものの確かに有給の就職口はなく、某医学部の研究室で無給助手として働き始めた。研究は面白かったが研究費から支給される給料は、時給換算すると当時のマクドナルドのアルバイトより安かった。幸い、結婚したのは大学院時代の先輩で、有給のポストを得ており、私が仕事をするのを当然と考えてくれたので、安い給料も遅い帰宅も問題にならなかった。数年後に私自身も別大学医学部の研究室に有給の助手の職を得て、微量元素や希土類元素の研究を20年余り継続してきた。9年前に、縁があってカトリック系の文系女子大学に籍を移し共通教養科目担当の教員として現在に至っている。前任校に客員の籍を置いていただき実験系の研究も継続している。自分は研究者に向いていないと悩んだこともあるが、面白いと思える仕事でお給料をいただけるということは実に幸運なことだと自覚している。

薬学は、化学、生物、物理系の基礎科目や薬に関連する広い分野を学ぶ。国家資格を取得できることもあって、新宿高校の女子で薬学に進んだ人はかなり多かった。大学の同期は、製薬会社やその研究所、病院薬局、調剤薬局、試験機関や大学等に勤めた。女性は仕事を中断しても、子育てが一段落したあと薬剤師として仕事をしている人が多い。2006年から、薬剤師養成課程が6年制となり、創薬研究者等養成

を目指す4年制課程では受験資格が得られなくなった。従って、受験の時点で将来の仕事はある程度決めなくてはならず、大学時代に自問自答しつつ将来の道を決める時間的な猶予がなくなった。今は、薬剤師の仕事が、従来の薬剤管理や調剤に加えて、地域や病院で多職種医療チームの一員として薬物治療に関わる役割に広がる過渡期であるが、待遇を含めた着地点はまだ定かでない。

私は、世の中で最も面白いことは「子育て」と信じており、高校時代から子どもは絶対に欲しかった。望んでも授からない時期を経験したお蔭で、子どもの成長過程で遭遇したいろいろな問題は大了ることではないと思うことができた。仕事も子育ても手に入れたかった欲張りな私が、曲がりなりにもやってこられたのは、伴侶、親(特に母)や姉、保育園、ベビーシッター、友人などの多くの援助のお蔭である。

現在、大学では、公衆衛生や健康関連の授業、食品や環境を取り扱う実験授業のほか、心身の不調のある学生のサポート部署にも関わっている。文系の学生も「科学的なものの見方」を身に着けることは大切で、自らの健康を護るための知識と、情報を正しく理解する能力を備えて、将来の自分と家族の心身の健康に寄与できる人になって欲しいと願っている。学生たちが4年の間に成長して、社会に出ていく姿を見ることは私にとっても大きな喜びである。

私は薬剤師として働く機会は持たなかったが、健康に関連した仕事を続けていられることは楽しく、その幸運に感謝している。私はかつて望んだ「自分で食べていける人」になることができた。同時に、「自分一人で生きていける人」など一人もいないことも学んだ。今は、自分がこれまで周囲から受けたさまざまな恩恵を、何らかの形で誰かに還していくことができる人でありたいと切に願っている。

(朝陽同窓会のご協力を得て「先輩からの言葉」を掲載しています。)